**校長　井上　省三**

**令和５年度　学校経営計画及び学校評価**

１　めざす学校像

|  |
| --- |
| 社会に貢献する共創力をみがく (主体性・寛容性・探究心を養い共によりよく生きる力を育む)  １　国際社会の様々な人や組織と共に活躍できるよう、多様な国際交流プログラムを提供し、英語力の向上と国際理解の習得に取り組むと同時に社会の課題を発見し解決できる人材を育てる学校。  ２　子どもたちの多様な才能を共に見つけ、更に伸ばし、それが生かせる未来を創造できる多様性のある教育システムを提供する学校。  ３　常により先進的な教育プログラムと学校運営のスタイルを提供できる学校として、府民とその子どもたちの信託に応える学校。 |

２　中期的目標

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 1. **学力向上**   （１）基礎学力の定着と向上を全教員の目標とし、授業改善に取り組み、更なる授業力向上に努める。  （２）学習・学校行事・部活動・家庭生活時間のバランスを考え、自己の時間管理をすることで、授業外での学習時間数を向上させる。  （３）各自がめざすべき進路に合わせ、計画的に学力の定着と個性の伸長を図る。  （４）ICTの活用などにより、コロナ禍においても学習を途切れさせることなく、着実に教育が届く環境を整える。  （５）学校教育自己診断を活用し、全教員の授業力の分析を行う。  （６）中学ならびに高校１・２年生の英語において習熟度別授業を行う。  ※教育産業が提供する外部評価基準（GTZ）において令和７年度にはCDゾーンを10％以下にする。（R３：11％、R４：８％）  ※授業満足度調査において令和７年度には80％以上の肯定的な回答を獲得する。 （R４：80.1％）   1. **IBワールドスクールとして高校に繋がるIB教育・探究学習を推進する**   （１）「総合的な学習の時間」で全生徒に対し探究学習「クリエイティブラーニング」を実施し、論理的思考力及び批判的思考力を育成する。  （２）中学校から「IBの学習者像」を授業やHRの中で取り上げ、IBに対する関心を高めていく。  （３）IB教員が国際バカロレア（IB）コース以外の授業を一部担当し、IB教育の手法にて授業を展開する。  （４）教員とIBのコアであるATL（Approaches to teaching and learning：学習のアプローチ）を研修にて確認し、生徒の学習態度を向上させる。  （５）IB理解を深めるために中学生向けのIB説明会を充実させる。  （６）基礎学力、英語力の向上ならびに探究授業の充実、海外大学進学説明会を実施し、IBコースに進む生徒の育成を行う。  ※外部評価基準の課題発見テスト標準レベルにおいて、中学卒業時に\*B１レベル に達する生徒割合を令和７年度には87％以上にする（R３：85％、R４：43％)  \*A１→A２→B１と数値が上がり、基礎段階の学習者から自立した学習者へと変化する。   1. **個性を見つけ、可能性を伸ばす**   （１）キャリア教育を中学１年から段階的に進め、各自の個性、能力を認識させる機会を作る。  （２）英語教育や国際理解教育の機会を充実し、英語への興味関心を高めると同時に、英語４技能５領域を総合的に学習し、発信力を向上させる。  （３）運営管理者（学校法人大阪YMCA）の多様な国際交流事業等を積極的に展開し、多様性を受け入れ、他国の人々と協働する態度を育成する。（コロナ後）  （４）英語以外の教科や課外活動等で知識や技能を向上させる。進路実現に向けた実績となる活動（検定、コンテスト参加、ボランティア活動）を促進する。  （５）外部講師を招いた各種講演会や研修会を開催し、生徒各自の興味の方向性を理解させ、自身の意見を述べる態度を育成する。  （６）本校の教育の特色を大学入学後さらに伸ばしてもらえる中学校・高校・大学連続した教育の仕組みづくりに着手する。  ※英語のCEFR目標　＜CEFR　A１＝英検３級、A２＝英検準２級、B１＝英検２級、B２＝英検準１級＞   |  |  |  | | --- | --- | --- | | 中学１年時CEFR | 中学２年時CEFR | 中学卒業時CEFR | | A１　100％ | A１　100％　／　A２　30％ | A２ 100％　／　B１　10％ |   ※令和７年度には全生徒が年１回以上の大会・コンテストに出場する。（R４：全生徒の８％）  ※令和７年度には国際コンテスト・大会の出場者を年間５名以上出す。（R４:０名）  ※令和７年度には海外研修旅行の実施を年に２回以上行う。またその参加者合計数20名以上とする。（コロナ後）（R４：０回）  ※令和７年度には外国からの教育旅行・インターンの受け入れを年間30名以上受け入れる。（コロナ後）（R４：０名））  ※令和７年度には交換留学（姉妹校）の提携を３校以上にする。（コロナ後）（R４:０校）   1. **生徒・教職員が安心して生活できる環境づくりを行う**   （１）生徒主体による「生徒の行動規範（suito Model）」づくりを通じて社会の一員として通用する責任感・基礎的スキルの土台作りを行う。  生徒一人ひとりの個性を大切にするとともに、自律した一人の社会人としての責任ある行動、思いやりのある行動を定着させる。  （２）個別に支援が必要な生徒への対応については、校内の特別支援委員会を中心に、きめ細やかな運用を行う。  （３）基本的な生活習慣を確立し、規律ある行動をとることのできる、社会性の豊かな生徒を育成する。  （４）生徒会／GAPS（Global Action Project in suito）活動を活性化し、学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させ、「生きる力」を育む。  （５）新型コロナウイルス感染症に関しては「子どもの安心・安全の確保」「学びの保障」「人権尊重の教育の推進」「教職員の負担軽減」の４観点を踏まえ、長期的な対応に努める。  （６）特に支援を要する生徒・保護者についてはカウンセラーを活用すると同時に「支援チーム」を立ち上げ、個別のケースに対応した教育・生活指導を行う。  （７）SUITO MODEL PROJECT（生徒の行動規範）の策定を行うにあたり下記の点を強く意識して指導する。  ・希望をもって共に生きる社会の実現をめざした学校をつくる。（YMCAの基本理念）  例）ボランティア精神をはぐくみ、互いに協力し、明るくあたたかい地域社会の形成に努める。  ・未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身につける。（IBの基本理念）  ・社会が求める資質・能力を身につける。（経済産業省「社会人基礎力」）  （８）災害や事故に備えて、マニュアル整備や情報提供システムを整備し、実効性のある危機管理体制を確立する。  （９）学校教育自己診断を活用し、学校の教育力分析を行っていく。  （10）LHRの特別授業を用い「いじめについて考える日」「YMCAの取り組むピンクシャツデー」「制服を通してLGBTQを考える」人権意識を高める。  （11）生徒に対してSNS／ネット安全教育を１回実施し、情報リテラシーを高める。  （12）教員に向けてヤングケアラーの理解について研修を１回行い、早期発見に努める。  ※令和７年度には支援を要する生徒に対して「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成実施率を100％にする。（R４：100％)  ※令和７年度には「自主的な活動が活発である」の肯定率を90％以上にする。（R４：94％）   1. **進路指導を強化する**   （１）キャリア教育を行うと同時に、自らの進路目標を立てさせることを通して学習意欲を高める。  （２）学習到達度を定期的に測定しながら、自己実現に向けた具体的な支援を行う。  （３）進路情報を積極的に活用し、進路選択を支援する。  （４）中学校・高校・大学10年連続した教育システム構築のための連携校確保に向けた活動を開始する。  （５）海外に姉妹校、連携校を確保し、海外進学志向の促進を図る。（コロナ後）  （６）学校教育自己診断を用いて、学校の教育力分析を行っていく。  （７）職業体験インターンシップを実施する（コロナ後）  ※令和７年度には進路指導研修会を年間３回以上行う。（R４：０回）  ※令和７年度には海外大学進学説明会を年間１回以上行い、海外大学進学をめざす生徒の支援を行う。（R４：３回）   1. **校務整理と人材育成を図り、教育効果の高い学校運営を行う**   （１）各学年・分掌の長の責任と権限委譲を促進する事により、効果的かつ迅速な学校運営を行う。  （２）若手や女性を積極的に登用し、管理職直轄で指導する事により、人材の育成を図る。  （３）学校評議会の提言を踏まえ、学校運営の改善を進める。  （４）役割と業務の明確化、責任分担により分かりやすく働きやすい職場環境づくりを進める。定時退勤率の計測を行う。  （５）校内に研修担当を置き、計画的に教員の資質向上策を講じる。  （６）IBワークショップへの参加、探究型の授業の強化のためファシリテーション研修やコーチング研修に参加する。  （７）ICT研修を行い、オンライン授業においてグループ討議や双方向の授業メソッドの充実を図る。   1. **開かれた学校づくりを行う**   （１）学校説明会及びパンフレット等の広報媒体を充実させる。  （２）本校の教育方針・教育活動について、あらゆる機会・方法を活用して積極的に発信する。  （３）地域と連携し、「地域の教育拠点」としての機能を果たす。  （４）学校の特色ある教育活動について幅広く情報発信をすることにより、小・中学生を含む地域の方々の本校への理解を深める。  （５）校長と保護者が語る会を実施する。  （６）2025年大阪万博に向けて地域と連携し、世界に関わり地域に貢献する。  （７）ネイティブ教員が各地域の学校へ、本校生徒が小学校の探究クラスへ、本校教諭が大学への講義へ出前授業を行う。  ※令和７年度には地域（行政、大学、研究機関、企業、NPO等）を巻き込んだ地域フォーラムを20団体以上の参加を得て開催する。（コロナ後）（R４：０団体）  ※令和７年度には教員による出前授業を年間３回行う。（R４：３回,R５：３回）  ※令和７年度には教育委員会と連携し、本校の特徴的な取組についての教育研修を年間２回以上開催し、特徴ある教育手法を広げる。（R４：６回） |

【学校教育自己診断の結果と分析・学校評議員からの意見】

|  |  |
| --- | --- |
| 学校教育自己診断の結果と分析［令和６年１月実施分］ | 学校評議員からの意見 |
| 回答率は、教師93％(14/15)、生徒29％(69/237)、保護者57％(135/237)となった。  結果について、「ややあてはまる」・「よくあてはまる」を肯定的、「あまりあてはまらない」・「あてはまらない」を否定的とみなし、評価する。   1. 教育活動・カリキュラムの面についての満足度は、教師73％、保護者70％、生徒83％となった 全体的にICTの活用については、ほぼ90％以上の肯定的な評価を得ている一方、教科間の相互の関わり合い(約46％)については、中立的～否定的な結果となった。 2. 学校生活については、学校へ行くのが楽しいに対し、生徒78％、保護者78％が肯定的な解答となっている。学校行事などは、生徒の約80％以上の肯定的な意見がある反面、担任の先生以外にも保健室や相談室等で、気軽に相談することができる先生がいる、の項目では、39％と低くなっている。 3. 進路指導については、生徒74％、保護者76％が肯定的にとらえられている。 4. 学校全体としては、特色のある学校教育を実施しているという点においては、生徒・保護者より約95％と肯定的な評価を得ている。   全体として、数値化すると61%の満足度となっているが、その理由としては、「中立的」を選択している回答が多いことに起因していると考えられる。次年度に向けては、評価の高い点については維持しつつ、「中立的」の回答が多かった各種項目において、肯定的な回答を得られるよう、授業・試験・成績、学校行事、安全面、学校外のコミュニティとの関わりについて、改善していく必要がある。 | 第１回（７/12）  〇R５年度学校経営計画について  ・英語のCEFR目標が達成されている事に関連して、評議員より英語力だけでなくプレゼン力も高まっており、引き続き自分を表現するスキルの向上に対して期待しているとの意見があった。  ・「７.開かれた学校づくりを行う」の「（７）2025年大阪万博に向けて地域と連携し、世界に関わり地域に貢献する。」に対して、評議員より「ATCにおいても様々なイベントや展覧会、講演会を行っている。社会に開かれた学校への協力、探究教育の推進のため地域の方々や企業の方々とのネットワーキングについてお手伝いをしていきたい。」との意見があった。  第２回（12/21）  〇R５年度学校経営計画中間評価について  ・キャリア教育に関する報告を受けて、評議員より引き続き企業の方々や様々な経歴を持つ方の特別講義を持つ機会を増やし、より深く生徒自身の将来を考える機会を設けてほしいとの意見があった。  ・海外研修旅行に関する報告を受けて、評議員より大学での海外インターンシップが増えている現状の報告と、大学での海外共同研究をスムーズに行うためには、高校時代からの語学の研鑽は必須であるとの助言があった。  ・国際交流に関する報告を受けて、評議員より万博開幕まであと１年になり、ATCにおいても国際交流に関する企画を行っていく予定なので、情報提供と共に協働を行っていきたいという意見があった。  ・開かれた学校づくりの報告を受けて評議員より、生徒が英語の授業を小学校で展開したりする等の学校交流を通してお互いに刺激を与えあえる関係づくりを行っていきたいとの意見があった。  第３回(３/14)  〇R５年度学校経営計画の年度評価について  ・評議員より学校経営計画の中身や評価内容を、保護者にも学校の取組を理解してもらえるように積極的に発信すべきとの意見があった。今後、期待に応える形で保護者会等での連携強化に向けて取り組む旨の回答を行った。  ・評議員より地域連携に関しては地域の学校ともより連携を行い、新たな形の教育に関する学びを深めたいとの意見があった。  ・評議員より地域の様々な場所で活動の場が広がっている事を評価しており、これからより取組を進めてもらいたいとの意見があった。 |

３　本年度の取組内容及び自己評価

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 中期的  目標 | 今年度の重点目標 | 具体的な取組計画・内容 | 評価指標[R５年度値] | 自己評価 |
| 学力向上 | （１）  授業改善に取り組み、更なる授業力向上に努める  （２）  スケジュール管理等による授業外学習時間の向上  （３）  めざすべき進路にあわせ、計画的に学力の定着と個性の伸長を図る | （１）  授業アンケート結果等を参考に、自己・教科の振り返りを行い、授業改善に努める。  （２）  各教科の１週間における授業外学習時間の目標を示し、自己のスケジュールを管理させる。  （３）  進路情報をホームルームにおいて生徒・保護者に発信する。 | （１）  授業満足度調査において80％以上の肯定的な回答を獲得する。[82.7%]  （２）  授業外学習時間の中学校平均を  平日１時間半以上とする[54分]  休日２時間以上とする[１時間44分]  （３）  進路情報を生徒・保護者に年間３回発信する。[３回] | （１）  いずれの教科も80%を超える満足度を得ており、いくつかの教科は90%を大きく超えるものもある。生徒の授業に対する満足度は高い。（◎）  （２）  目標値の達成までには隔たりがあるので、引き続きスケジュール管理を徹底するように指導を行う。（△）  （３）  学習支援クラウドサービスを通じて、課外活動、コンテスト関連など、多くの情報を周知できた。保護者に対しては、ホームページなどを通じて、より情報を発信していく。（〇） |
| IB教育を推進する | （１）  「総合的な学習の時間」で全生徒に対しクリエイティブラーニングを実施し、論理的思考力及び批判的思考力を育成する。  （２）  「IBの学習者像」の啓発を行う。  （３）  IB理解を深めるために高校１年次のIB説明会を充実させる。 | （１）  外部評価基準の課題発見テストのレベル強化を行う。特に記述試験において「意見構築力」が他の項目よりも弱くなっているため、各授業においてプレゼンテーション形式の課題だけでなく、その意見をより論理的に文字におこす練習と課題を行う。  （２）  「IBの学習者像」の啓発をHRにて行う。  （３）  IB説明会を中学生対象に行う。 | （１）  外部評価基準の課題発見テスト標準レベルにおいて、中学卒業時に\*B１レベル に達する生徒の割合を50％にする[59％]  （２）  ホームルームや授業内に「IBの学習者像」の発信を対象学年において年間３回行う。[３回]  （３）  IB説明会を中学生対象に年間１回行う。[２回] | （１）  昨年度未達であった目標を達成できた。現状の数値を最低限維持していくことを前提に、これからは、この数値が大学進学とどのような相関があるのかをみていく必要があると考える。（〇）  （２）  総合的な学習の時間において「IBの学習者像」を意識させる活動を実施（３回：各学年１回）（○）  （３）  生徒全員対象説明会（１回、中３）、希望生徒・保護者対象の説明会（１回、中３）を実施し理解が進んだ。（○） |
| 個性を見つけ、そのスキルを伸ばす | （１）  キャリア教育を中学１年から段階的に進め、各自の個性、能力を認識させる機会を作る。  （２）  英語教育や国際理解教育の機会を充実し、英語への興味関心を高めると同時に、英語４技能５領域を総合的に学習し、発信力を向上させる。  （３）  英語以外の教科や課外活動等で知識や技能を向上させる。進路実現に向けた実績となりうる活動（検定、コンテスト参加、ボランティア活動）を促進する。  （４）  探究授業を通して、生徒各自の興味の方向性を理解させ、自身の意見を述べる態度を育成する。 | （１）  中学１年：自己分析、中学２年：ゲストスピーカーによる職業講話、中学３年：大学進学に関する講話等、それぞれの発達段階に応じたキャリア教育を行う。  （２）  英文の多読プログラム展開、ランゲージセンター（昼休み・放課後の英語を使う時間）の設定を行い英語への興味関心を高める。  （３）  各教科会にてコンテスト等を１つ定め、英語弁論大会やWWL（ワールドワイドラーニング）の大会に出場する。そして各教科内での役割分担としてコンテスト担当教員を決め、コンテスト選定、紹介、生徒への奨励・選抜を行っていく。  （４）  探究授業の中で中間発表、成果発表を実施する。 | （１）  キャリア教育に関する取組みを年間２回行う。[２回]  （２）  以下の英語のCEFR目標を達成する。  中学１年：A１ 100％  中学２年：A１ 100％、A２ 80％  中学３年：A２ 100％、B１ 30％  [R５：  中学１年：A１ 99％  中学２年：A１ 100％, A２ 93％  中学３年：A２ 95％, B１ 25％]  （３）  年１回以上の大会・コンテストに出場者を全生徒の10％にする。[100％]  （４）  生徒によるプレゼンテーション開催を年２回以上行う。[２回] | （１）  Holland Codeを利用した職業選択講習や、複数の教員による海外留学講話などを行った。中学生から、高校１・２年生でのコース・科目選択について尋ねられることが増えた。水都国際でどのようなカリキュラムがあるのか、進路を自分事として捉えるようになった生徒が増えた。（〇）  （２）  中学３年生の結果に関しては、やや目標値を下回った。TOEFL Jrの受験者数は昨年より増加しており、最上位層に関しては増加している。（△）  （３）  コンテストの参加率に関して、作文コンクールなど、授業の一環としてコンテストに参加したため、100％の参加率となった。（◎）  （４）  本の紹介や数学の魅力を伝えるプレゼンテーションを行った。（〇） |
| 生徒・教職員が安心して生活できる環境づくりを行う | （１）  生徒主体による「生徒の行動規範（suito Model）」づくりを通じて社会の一員として通用する責任感・基礎的スキルの土台作りを行う。  （２）  個別に支援が必要な生徒への対応については、校内の特別支援委員会を中心に、きめ細やかな運用を行う。  （３）  生徒会／GAPS活動を活性化し、学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させ、「生きる力」を育む。  （４）  様々な取り組みの中で、人権意識を高める。 | （１）  suito Modelの作成を行い、その後啓発のための取組みを生徒と共に行う。  （２）  スペシャルニーズコミッティーの活動を通して、支援を要する生徒に対して「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成実施を行う。  （３）  体育祭、文化祭、GAPS活動、ボランティア活動において生徒が活動目標、内容を決定し、より主体的に活動を進める。  （４）  LHRの特別授業を用い「いじめについて考える日」「YMCAの取り組むピンクシャツデー」「制服を通してLGBTQを考える」を実施する。 | （１）  suito Modelの作成を行い、教員研修を２回行う。[２回]  （２）  支援を要する生徒に対して「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成実施率を100％にする。[100％]  （３）  「自主的な活動が活発である」の肯定率を90％にする。（新規）[73.5%]  （４）  人権意識を高める取り組みを年３回行う。[３回] | （１）  教員研修を２回行った。今後も、人間関係づくりなどに活用していく。（〇）  （２）  支援を要する生徒に対して「個別の教育支援計画」の作成率は100％であった。引き続き取り組みを強化する（〇）  （３）  体育祭、文化祭については、80％を超える生徒が肯定的な回答になっている。生徒会とGAPSについては関わっている生徒によって大きく評価が異なっている。そのため、より学校規模で生徒会と、GAPS活動について、体系的に取り組むことが必要である。（△）  （４）  特別授業において人権意識を高める取り組みを年３回実施（〇） |
| 進路指導を強化する | （１）  学習到達度を定期的に測定しながら、自己実現に向けた具体的な支援を行う。  （２）  海外進学志向の促進を図る。 | （１）  チャレンジテスト、外部模試、思考力課題発見テスト、TOEFL Primary、TOEFL Jr.を実施し、学習到達度を測定し、支援を行う。  （２）  海外大学進学説明会、海外進学の個別面談、特別授業のグローバルデイにて海外の生活や勉強、働く事について授業を実施し、生徒の支援を行う。 | （１）  教育産業が提供する外部評価基準（GTZ）においてCDゾーンを10％以下にする。[６％]  （２）  海外大学進学説明会を年間３回行い、海外大学進学をめざす生徒の支援を行う。[３回] | （１）  昨年よりも高い数値で目標を達成している。CDゾーンに属している生徒情報とこれからの対策を共有することで、学校として一貫性のあるフォローアップができた結果であると考える。（◎）  （２）  指標通り、生徒の視野と選択肢を広げるキャリアガイダンスを行うことができた。（〇） |
| 校務整理と人材育成を図り、教育効果の高い学校運営を行う | （１）  役割と業務の明確化、責任分担により分かりやすく働きやすい職場環境づくりを進める。  （２）  オンライン授業においてグループ討議や双方向の授業メソッドの充実を図る。  （３）  役割と業務の明確化、責任分担により分かりやすく働きやすい職場環境づくりを進める。 | （１）  ア　役割に応じた主任主導のOJTを進める。  イ　IBワークショップへの参加、探究型の授業の強化のためファシリテーション研修やコーチング研修に参加する。  （２）  ICT研修を行い双方向授業やグループワーク等のオンライン授業力の向上を図る。  （３）  勤怠管理システムの導入を行う。 | （１）  ア　校務に関する研修に３名の教師を参加させる。[14名]  イ　探究型の授業に関する研修に５名の教師を参加させる。[９名]  （２）  双方向授業やグループワーク等のICT研修を年２回行う。[２回]  （３）  定時退勤率の計測を行う[未計測] | （１）  ア　研修14名参加により役割の理解を推進できた。組織作りに活かすよう体制を作っていく。（◎）  イ　研修28名の参加により教員の資質アップとなった。本校の教育活動により還元していくことが望まれる（◎）  （２）  技術的なICT研修を２回実施した。コロナ禍での完全オンライン授業のニーズは減ってきているが、一部オンラインを取り入れたような、より双方向授業の実現に向けたICT研修を実施していきたい。（〇）  （３）  全職員の職務分掌の整備及び、出退勤管理のデジタル化実施（システムは未導入）定時退勤率の管理は管理職の現認にて実施の為、数値化されていない。（△） |
| 開かれた学校づくりを行う | （１）  地域や保護者の声を聞き取る仕組み作りを行い、教育に反映させる。  （２）  学校の特色ある教育活動について幅広く情報発信をすることにより、中学生を含む地域の方々に本校の理解を深めてもらう。 | （１）  校長と保護者が語る会を行う。  その中で本校の課外活動に関する方向を説明する。  （２）  ア　ネイティブ教員が各地域の学校へ、本校生徒が小学校の探究クラスへ、本校教諭が大学への講義等の出前授業を実施する。  イ　教育委員会と連携し、本校の特徴的な取組みについての教育研修と研修動画作成を実施する。 | （１）  校長と保護者が語る会を１回行う。[１回]  （２）  ア　教員による出前授業を年間３回行う。[３回]    イ　本校の特徴的な取組についての教育研修を年間２回開催する。[２回] | （１）  学校全体保護者会という形で、12月９日に実施。課外活動のみならず、今後の教育活動に関する方向性を説明。（〇）  （２）  ３回行った。引き続き特色ある教育活動の理解を広げていく。（〇）  イ 今年度は該当する研修は２回にとどまった。一方、多数の本校視察（12回）があり、その多くが本校を知るための研修的な側面があり、包括的に、本校の教育実践を広めていく場として捉えていきたい。（〇） |